

1歳代の表出語彙の発達

— 品詞による分析；動詞 —

藤原 雅子 笠井 新一郎 今給黎 禎子
飯干 紀代子 山田 弘幸 倉内 紀子

Vocabulary Development in Children aged 12-23 Month

— Correlation of Verb —

Masako FUJIWARA Shinichiro KASAI Teiko IMAKIIRE
Kiyoko IIBOSHI Hiroyuki YAMADA Noriko KURAUCHI

Abstract

In the present study, the vocabularies of 310 children aged 12-23 months were assessed.

This study aimed to elucidate the relationship between age and the number of verbs that children have acquired, the word category that is acquired earliest, and the relationship between the sequence of vocabulary and the rate at which the proportion of acquired words increases with age.

Although the proportion of verbs in the vocabularies of all children was found to be low in comparison with the proportion of nouns, high-frequency words tended to be associated with the children's daily lives, their own actions, and depicting meaning.

These results indicate that environmental factors, the frequency of actions, and the proximity of the actions influence vocabulary acquisition. However further research is necessary in order to examine additional methods for classifying verbs, and to determine more appropriate methods of data collection.

Key words : vocabulary development, part of speech, verb, a high frequency word

キーワード：語彙発達，品詞，動詞，高頻度語

I. はじめに

私たちは、1歳0か月から1歳11か月の子どもの表出語彙の調査を行い、各年齢における平均表出語彙数と、品詞別語彙数、性差について報告した¹⁾。その結果、年齢と語彙数は相関が高く、品詞別語彙数では名詞の表出

語彙に占める割合が高いという特徴が見出された。性差については1歳代を通して女兒優位の傾向が認められた。

また、子どもが初期に獲得する語彙として優位（頻度が高く、早期に獲得する）とされる名詞について、語彙数、カテゴリー、高頻度語について分析し、報告した²⁾。その結果、名詞の語彙数は年齢とともに増加すること、カテゴリーについては1歳代通して「動物」「人々」「食

物と飲物」が上位を占めること、各年齢が獲得し高頻度に使われている語彙は事物名称であり、子どもの日常生活に結びついた具体的な語彙であることが見出された。

語彙発達の研究では、語彙量の増加、語の一般的な発達、語彙体系の問題が主要テーマであり、個別の語を取り上げ、その発達について検討したものは少なく、上記のような名詞各語についての検討は重要であると考えられる。そこで、本稿では品詞のうち、名詞と並んで研究対象とされる動詞に着目し、1歳代に獲得される動詞について、語彙数、高頻度語、その分類に基づき、初期に獲得される動詞について分析を行った。

また、語彙は言語発達の指標として用いられることより、1歳代の語彙発達を把握し、語彙数や品詞特徴について検討することは乳幼児健康診査への応用を検討する際、また、言語聴覚障害を持つ子どもへの訓練語彙を検討する際、重要な意味を持つと考えられる。

予後予測について、今回の結果から示されたことは、上肢機能の状況がADL遂行にそのまま反映されるものではなく、その個人のもっているいくつかの代償機能を含めた能力的側面が関わることが考察されたため、予後予測するための要因を上肢機能のみで見出すことはできなかったといえる。今後、Fugel - Meyer評価法の全項目での検討が必要である。また、今回、上肢F・Mの中のどの項目がFIMのどの項目に影響を与えているかの検証にまでは至らなかった。今後、対象人数を増やし細かい項目までも含めた検討が必要である。

II. 方法

1. 対象および調査方法

A県の保育所に通所している1歳0か月～1歳11か月の養育者377名に、語彙チェックリストへの記入を依頼した。

チェックリストは無記名で、基礎情報として対象児の年齢、生年月日、性別を記載してもらった。記載不備等により使用できなかったものを除いた310名分（男児150名、女児160名）を集計し、分析した（有効回答率82.2%）。

表1 調査対象児の年齢分布

生活年齢	男	女	合計
1:0	9	10	19
1:1	10	11	21
1:2	9	13	22
1:3	11	16	27
1:4	14	7	21
1:5	12	16	28
1:6	15	17	32
1:7	17	18	35
1:8	12	12	24
1:9	17	13	30
1:10	15	14	29
1:11	9	13	22
合計	150	160	310

対象児数は、生活年齢間で差が見られるが、おおよそ20～30名であり、最も人数の少ない年齢が1歳0か月の19名で、最も人数の多い年齢は1歳7か月の35名であった（表1）。

男女別に人数構成を見ると、1歳4か月の男児14名、女児7名を除いてはほぼ同人数であった。

2. チェックリストの内容

調査で用いたチェックリストは品詞として名詞176語、動詞123語の他、代名詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞等を含む、全語彙数452語であった。ただし、1歳0か月から1歳7か月児では、同チェックリストの短縮版（80語）を使用した。

なお、今回の調査では、子どもがどのような語彙を獲得し表出しているかを見ることを目的としているため、集計において、幼児語・成人語を区別しなかった。

3. 結果の分析

動詞の語彙数は、先行研究の多くが代表値として平均値を用いているため、本研究でも比較のために各年齢における平均値を算出し、最小値と最大値を併記するとともに、総語彙数に占める割合を算出し、さらに、各年齢における高頻度語を抽出し、先行研究をもとに特徴を分析した。

Ⅲ. 結果

1. 全表出語彙数に占める動詞の割合

動詞の平均語彙数が1語を超えるのは1歳5か月以降であり、その後ひと月平均1語ずつ増加する(図1)。表出語彙数に占める語彙数・割合ともに少ないが、動詞は年齢を追うごとに増加していた。

動詞の割合の変化を見ると1歳7か月は3.2語で10.1%，1歳8か月は4語で6.7%，1歳9か月は5.6語で9.4%であった。1歳10か月になると12.5語で13.1%，1歳11か月は16.2語で14.7%であった。

2. 動詞の平均語彙数と割合の年齢推移

動詞123語のうち、養育者が表出していると回答した語彙について、各年齢の動詞平均語彙数を算出した(図2)。

1歳0か月の表出されている動詞の語彙数の範囲は0語～2語で平均値0.16±0.49語であった。1歳6か月では表出されている語彙数の範囲は0語～7語で平均値2.41±2.08語であった。1歳11か月で表出されている語彙数の範囲は0語～120語で平均値16.2語±25.4語であった。

動詞の平均語彙数が1語を超えたのは1歳5か月、10語を超えたのは1歳10か月であった。1歳5か月までは、ほぼ横ばいであり、増加の傾向は認められなかったが、平均語彙数が1語を超えた1歳5か月以降、緩やかに増加をしていた。1歳9か月時から表出語彙数が10語を超える1歳10か月では、5.7語から12.4語へと倍近くの増加を認めた。

3. 各年齢における高頻度語彙(表2)

今回分析の対象とした動詞123語の中から、子どもが表出していると養育者が回答した語彙上位5位(以下、高頻度語)を抽出し、上位より順に記載した(表2)。なお、1歳5か月までは表出語彙数が少ないため、表出された全ての語を抽出した。

1歳0か月で表出されている語彙は2種であり、上位から「捨てる」「寝る」であった。

1歳1か月で表出されている語彙は2種であり、上位から「寝る」「なおす」であった。

1歳2か月で表出されている語彙は2種であり、上位より「寝る」「なおす」であった。

1歳3か月で表出されている語彙は4種であり、「寝る」「なおす」「ある・あった」の順であった。

1歳4か月で表出されている語彙は6種であり、上位より「寝る・捨てる・ある・あった」「ちょうだい・なおす」であった。

1歳5か月で表出されている語彙は8種であり、そのうち上位5位は「寝る」「なおす」「ちょうだい」「すてる」「ある・あった」であった。

1歳6か月で表出されている語彙は8種であり、そのうち上位5位は「寝る」「なおす」「ある・あった」「捨てる」「ちょうだい」であった。

1歳7か月で表出されている語彙は10種であり、そのうち上位5位は「寝る」「なおす」「ある・あった」「捨てる」「ちょうだい・行く」であった。

1歳8か月で表出されている語彙は47種であり、そのうち上位5位は「ちょうだい」「寝る」「行く」「飲む・履く」「おいで・開ける」であった。

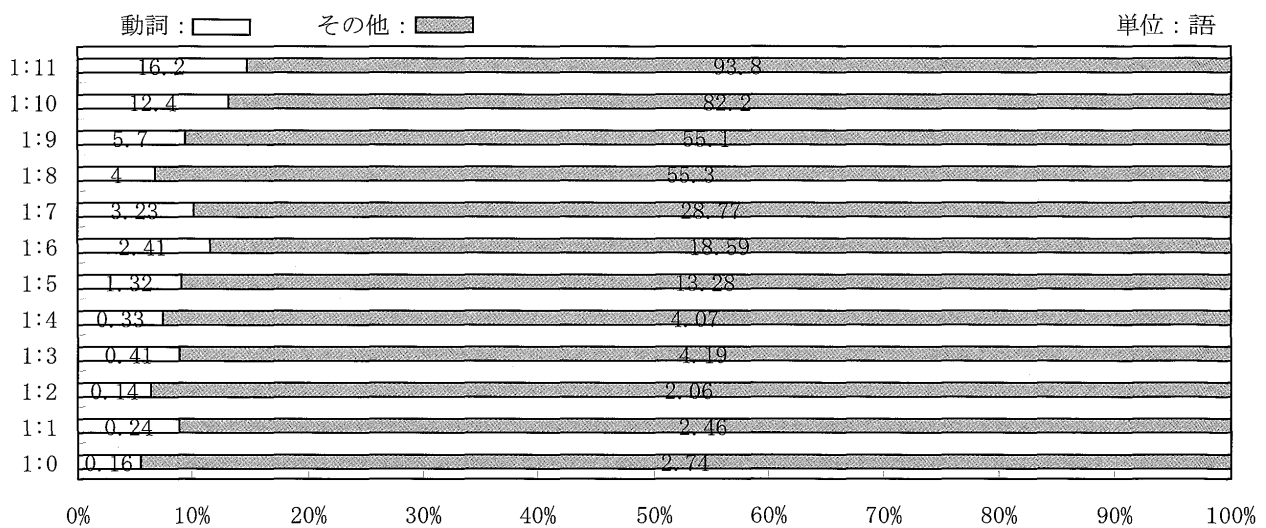


図1 全表出語彙数に占める動詞の割合

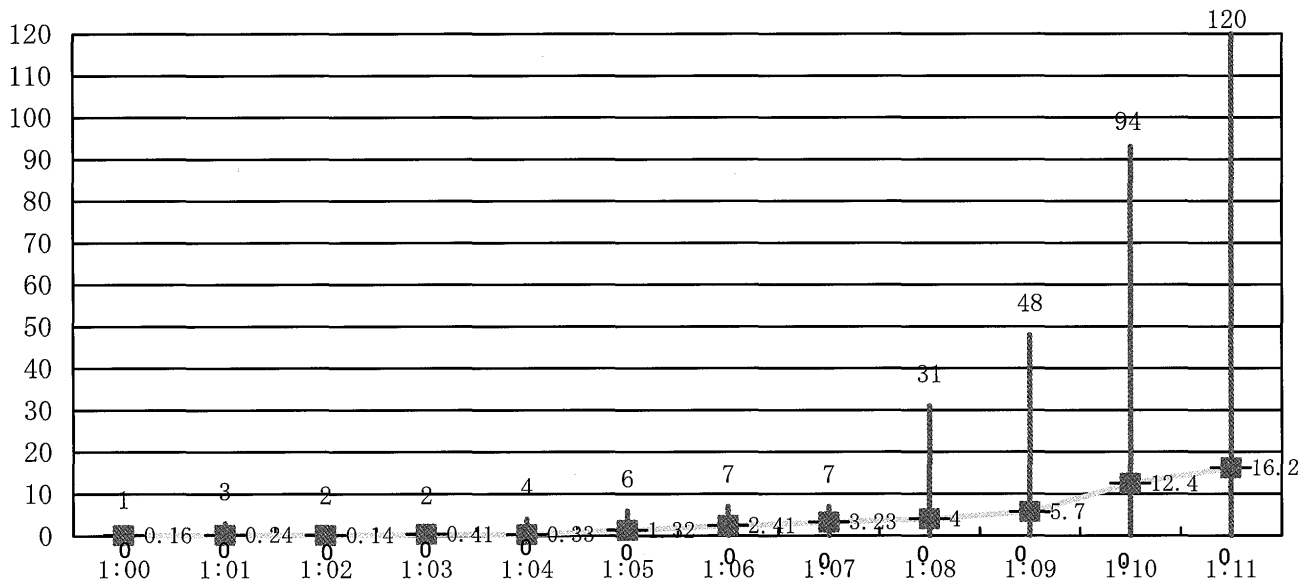


図2 動詞の平均語彙数の年齢推移

1歳9か月で表出されている語彙は67種であり、そのうち上位5位は「ちょうだい」「行く」「おいで」「寝る」「履く・違う・食べる・開ける」であった。

1歳10か月で表出されている語彙は114種であり、そのうち上位5位は「ちょうだい」「行く」「おいで」「寝る」「出る」であった。

1歳11か月で表出されている語彙は120種であり、そのうち上位5位は「ちょうだい」「おいで」「行く・脱ぐ」「開ける・書く・履く」「おりる・帰る・座る・寝る」であった。

1歳10か月および1歳11か月では、チェックリストに含まれる動詞123語に近い種類の語彙集であり、

表2 各年齢における高頻度語彙

	1	2	3	4	5
1:0	捨てる	寝る			
1:1	寝る	なおす			
1:2	寝る	なおす			
1:3	寝る	なおす	ある、あった		
1:4	寝る、捨てる ある、あった	ちょうだい なおす			
1:5	寝る	なおす	ちょうだい	捨てる	ある、あった
1:6	寝る	なおす	ある、あった	捨てる	ちょうだい
1:7	寝る	なおす	ある、あった	捨てる	ちょうだい 行く
1:8	ちょうだい	寝る	行く	飲む・履く	おいで、あける
1:9	ちょうだい	行く	おいで	寝る	履く、ちがう 食べる、開ける
1:10	ちょうだい	行く	おいで	寝る	出る
1:11	ちょうだい	おいで	行く、脱ぐ	開ける、書く、履く	おりる、帰る 座る、寝る

チェックリストの動詞数の上限にほぼ達していた。

増加特徴としては、1歳0か月から1歳7か月までは表出語彙もほとんど変化がなく、「寝る」「なおよす」「ある・あった」の3語が常に上位3位を占めていた。しかし、1歳8か月頃より、順位が入れ替わり始め、「ちょうだい」「おいで」「行く」の3語が上位3位を占めるようになった。

4. 動詞の分析

大久保⁴⁾の研究を参考に、動詞123語を「生活に必要な語（寝る・食べる・要る等）」「物事を行う語（する・行く・持つ等）」「知的行為（言う・読む・書く等）」「存在を表わす語（ある・居る等）」「自然にそのようになる語（なる・つく・こわれる等）」に分類し、各年齢における平均語彙数による上位5位を分析した。その結果、1歳0か月から1歳11か月においてほとんど上位のカテゴリーに変化はなく、「生活に必要な語」「物事を行う語」「存在を表わす語」であった。「知的行為」の語が初めて上位5位に含まれたのは1歳9か月時であったが、1歳10か月では上位に含まれず、1歳11か月時に再び含まれる等、浮動的であった。また、「自然にそのようになる語」は1歳0か月から1歳11か月を通して表出されていなかった。

分類した中で多かった語彙は、「生活に必要な語」では「寝る」「ちょうだい」。「物事を行う語」では「なおよす」「捨てる」「行く」「おいで」。「存在を表わす語」では「ある」「あった」。「知的行為」では「違う」「書く」であった。

また、別の分析方法として、前田ら⁵⁾の研究を参考に、「人の身体の動きに関わる語 ①目、耳、口等の動きに関わる語（見る、聞く、食べる等）、②手、足の動きに関わる語（取る、開ける、履く等）、③全身の動きに関わる語（寝る、抱く、座る等）、④移動に関わる語（行く、出る、入る等）」、「その他の語 ①存在に関わる語（ある、居る等）、②変化に関わる語（つく、消える等）、③感覚、感情に関わる語（泣く、怒る等）、④その他の語」に分類し上位5位に含まれる語の特徴を抽出した。その結果、1歳0か月から1歳11か月を通して、「人の身体の動きに関わる語」が大多数を占めていた。また、「その他の語」の中では、存在に関わる語のみが表出されていた。

特徴的なこととしては、1歳7か月までは「人の身体の動きに関わる語」のうち、③全身の動きに関わる語の「寝る」、または②手、足の動きに関わる語「ちょうだい」「なおよす」が多かったが、1歳8月以降、②手、足の動きに関わる語「ちょうだい」は変わらず上位だが、#全身の動きに関わる語に変わって\$移動に関わる語「行く」「おいで」が上位となっていた。

IV. 考察

1. 動詞の平均語彙数と割合の年齢推移

動詞の平均語彙数、全体の表出語彙数に占める割合は1歳0か月から1歳11か月を通して、他の品詞に比べて優位となることはなかったが、平均語彙数が1語を超えた1歳5か月以降、徐々に増加の傾向を認めた。

また、品詞に焦点を当て比較すると、1歳6か月までは70%以上が名詞であり、1歳8か月以降徐々に他の品詞が表出されるようになるが、この時期に動詞の数もそれ以前に比べ多い増加であった。これは平均語彙数の増加する時期（語彙の爆発的増加期）から約2~3か月後に起っており、名詞の増加の後を追う形で動詞が増加していることが考えられた。このことより、語彙の爆発的増加期に語彙の品詞構造の変化も起こり、その時期は1歳7か月頃であることが推測された。

この語彙の爆発的増加期は、子どもの認知や他者認識の発達等、様々な発達が生じる時期でもあり⁶⁾、これらの発達に伴って語彙獲得に質的变化がもたらされ、名詞以外の品詞、つまり動詞の獲得が進んでくると考えられた。

2. 高頻度語の検討

大久保や前田らの分類をもとにした、動詞の高頻度の分析からは、初期に獲得される語の特徴として、以下の二点が見いだされた。

第一に、初期に獲得される語の特徴として、身体的具体な動きについての語が最も多い点である。「寝る」「なおよす」等自分の意思を表す語や、「ちょうだい」「おいで」等相手への要求の語、「ある、あった」等事実確認の語の使用頻度が高い。

第二に、1歳7か月と1歳8か月の間に、動詞の質が変化するという点である。1歳8か月以降は、それまでに見られなかったような「ちょうだい」「おいで」「行く」等、他者を意識した語、移動に関わる語が表出され始める。また、それまでは上位5位に含まれなかった「書く」「読む」等知的行為に関わる語彙が高頻度語として表出されるようになっていた。

1歳8か月以降の語彙の質的变化については、「ちょうだい」については他者認識の発達、「おいで」「行く」子どもの移動能力の発達が関係していることが推測され、「書く」「読む」等の語の出現については、子どもが描画や絵本等に興味を持つようになることと関係していることが示唆された。

3. 初期に出現する動詞の要因

初期の子どもの語彙で名詞が優位であるのは普遍的な

現象である⁷⁾と報告されている。動詞は“活動、状況の変化、因果関係のような叙述的概念”であり、名詞類より変動しやすいため、子どもはその語彙がどのような活動、状況を表わすのかを発見しなければならない。その点で、名詞類より獲得が難しいとされている。そのため、よりその活動状況が分かりやすいもの、変動が少ないものから徐々に獲得されていくと考えられた。

このことを基に、ことばを獲得する過程での重要な条件を見ると、愛着関係、興味や探索心、模倣、発語器官の発達、弁別能力であるとされており⁸⁾、本調査において初期に出現する動詞は、子どもの認知発達や養育者からの言語入力が密接に関わっていると考えられる。語彙の獲得においては、個人差が大きく、そこには子どもの経験やこれまでの身近な大人との関係性との中でコミュニケーション経験が反映されているとされる⁹⁾。このような語彙の変化は乳児期からの豊富な経験、特に母子でのことばによるやりとりが、言語理解や表出にとって非常に重要であることを示していると考えられた。

言語段階と名詞、動詞の関係を見ると、動詞を使用するようになった子どもの言語発達段階は、統語段階以上であるといわれている。

日本語を母語とする子どもの初期発話の統語構造の研究では、早い時期(1歳10か月まで)に出現する構文群と、やや遅れてその2~3か月後に(2歳を過ぎて)出始める構文群があるとの報告がなされている。出現時期が早く、頻度が多い構文は、「主格+動詞」「対象+動詞」であり、2歳以前では「行為者と行為」の結合が圧倒的に多いとされており、統語に動詞の存在が非常に重要であることが示されている。

動詞の獲得には単語から構文(2語文)への発達の移行が含まれており、動詞の獲得は構文的機能の獲得につながるがいえる。いいかえれば動詞獲得が構文獲得を含み持っていると考えられることもできる。本調査の高頻度語では、1歳8か月以降の語彙の変化において、「ちょうだい」等のように語連鎖になりうる、なりやすい語彙が上位を占めるようになっている。

本調査は1歳0か月から1歳11か月を対象としており、2歳以降の結果と比較することはできないが、動詞に変化が見られる時期は1歳8か月以降であった。語彙のみを対象とした質問紙であったため、子どもの語連鎖の表出を把握できていないが、語連鎖の前段階として動詞の増加があることが推測された。

動詞機能の発達は、個々の動詞の特質に関わる問題であり、その動詞の持つ意味的役割と密接に関わっていると考えられる。そのため、子どもの語彙発達においては、

それぞれの動詞の持つ意味と子どもの興味・関心、具体的行動等の関わり合いによる語の選択等を考えていく必要がある。その点では、動詞を個別に検討していくことは必要であると考えられる。

V. おわりに

本稿では、1歳0か月から1歳11か月の子ども310名の「語彙チェックリスト」のデータ分析を行い、年齢における動詞語彙数の推移の傾向、年齢別語彙の獲得順序について検討した。その結果、年齢と動詞語彙数の関係、年齢別語彙の獲得順序が明らかとなった。

子どもがどのように語彙を獲得していくかを明らかにすることによって、乳幼児健診でのスクリーニングの基準値がえられ、また、発達に遅れのあり対応が必要な子どもの指導においても、語彙発達の構造を知ることで段階的な指導ができると考えられる。今回の調査もそのひとつの手がかりとなり得ると考えられた。

本研究での今後の問題点をあげると、①動詞の分類方法、②サンプルの収集方法があげられる。日本語の場合、幼児語使用が24か月頃まで非常に高いため、動作を表わす語彙を全て動詞とカウントしているが、幼児語(動作語)と成人語(動詞)を区別する必要があると考えられる。本調査は養育者へのチェックリストという形式を取っており、判断は養育者に委ねられていた。動作を表わす幼児語をどのように扱うかについては今後の課題である。

また、名詞・動詞以外の品詞についても同様の分析を行なう必要がある。それらの結果をふまえ、発達評価の指標となりうる語彙数および品詞別語彙、語彙の使用頻度について検討する必要がある。

VI. 文献

- 1) 藤原雅子, 今給黎禎子, 安川千代, 他: 1歳代の言語発達—1歳0か月から1歳11か月の表出語彙. 九州保健福祉大学紀要6: 235~241, 2005.
- 2) 藤原雅子, 笠井新一郎, 今給黎禎子, 他: 1歳代の語彙発達—品詞による分析: 名詞—. 九州保健福祉大学紀要7: 161~168, 2006.
- 3) 岩本さき, 笠井新一郎, 荻田知則, 他: 2歳児相談における事前問診語彙チェックリスト作成の試み—1歳11か月から2歳11か月の全使用語彙—. 高知リハビリテーション学院紀要2: 23~29, 2000.
- 4) 大久保愛: 幼児言語の研究—構文と語彙—. あゆ

- み出版, 東京, 1984.
- 5) 前田富祺, 前田紀代子: 幼児語彙の統合的発達の研究. 武蔵野書院, 東京, 1996.
 - 6) 小椋たみ子, 中則夫, 山下由紀恵, 他: 日本語獲得児の語彙と文法の発達-Clanプログラムによる分析. 神戸大学発達科学部研究紀要4 (2) : 31~57, 1997.
 - 7) Gentner, D. : Why nouns are learned before verbs, *Linguistic relativity versus natural partitioning*. In S. A. Kuczaj (Ed.), *Linguistic development : Vol.2. Language, thought, and culture*, Pp Hillsdale, NJ : Erlbaum. 301~334, 1982
 - 8) 松波和子: 初語獲得の言語指導. コレール社, 東京. 1997.
 - 9) 小山正: 子どもの言語獲得とそれを支える認知発達. *聴覚言語障害*, 28 (2), 87~95, 1999